アクエンアテンの都

王都アケトアテンに見るその政治と神学

森際　眞知子

愛知みずほ大学人間科学部人間情報学科

古代エジプト第 18 王朝のアクエンアテン王は、政を忘れ信仰生活に埋没し、王国が荒廃するにまかせた「異端王」として知られるが、はたしてそうであろうか。実態は逆に第 18 王朝における王による親政政治路線の完成者であり、優れた政治的センスの持ち主であると同時に神学的天才であったとも考えられる。王都アケトアテンとその建築物は、残された碑文などと共に、王の才能と限界を物語るものと解釈できる。

【キーワード】　第 18 王朝、正統性、アクエンアテン、アケトアテン、アテン神、アメン神、異端王、アメン神官団、官僚制、神学、宗教政策、アテン大神殿、都市計画、境界碑、アテン讃歌

第 18 王朝のアクエンアテンは､政を忘れ信仰生活に埋没し、王国が荒廃するにまかせた「異端王」として後世の人たちに知られているが、はたしてそれは正確な人物像であろうか。本稿は、第 18 王朝の正統性構造に関わる筆者の一連の論考で明らかにしてきたことがらに基づき、アクエンアテンは第 18 王朝歴代帝王の悲願である帝王親政を実現した、優れた政治的センスをもった名君であると同時に神学的天才であったと主張する。王都アケトアテンとその建築物は、残された碑文などと共に、王のこの才能と、その限界を物語ると考える。

第 1 節　異端王説の検討

第1項　問題の提起

エジプト学の著名文献はアクエンアテンを「異端王」と呼び、その統治ぶりを一代限りの、あだ花のような治世として哀れむ。[1]王はアメン・ラーを中心としたそれまでの伝統信仰を廃し、アテン神を唯一の神とする、後のキリスト教を思わせる一神教を奉じ、民衆の支持基盤を持たぬ上からの宗教改革を断行した無謀な君主として描かれる。この王は、アテン神を祭ることにうつつを抜かし、政治には無関心となり､シリア-パレスチナの属領からの救援依頼も無視し、[2]国の内外が荒廃し、栄華を誇ったエジプト第 18 王朝を没落に導いた[3]変人、異端とされる。はたしてこのようなアクエンアテン像は正確なのであろうか。アクエンアテンは狂信家にすぎなかったのであろうか。

この観点から関係文献を改めてよく見ると、たとえ彼が狂信家であったとしても、それは政治的無能ないし無関心を意味するのではなく、政治的才能と両立する、と考えるエジプト学者もいる。[4]本稿はこのような見方がより正確であると捉え、さらに一歩を進め、アクエンアテンその人がどのような自己理解をしていたとしても、客観的には、宗教改革を通して第 18 王朝歴代帝王の悲願であった帝王親政を完成させる、という歴史的役割を担ったものと捉える。すなわち、政治的才能との両立が可能性ではなく必然であり、それがあってこそ宗教政策が手段

＊　本稿執筆にあたって John Baines，屋形禎亮、森際康友の三氏から教示を受けた。記して感謝する。

[1] Redford1984, p. 233. 同書名が　『アクエンアテン--異端王』である。Cf. Hari1985, pp. 16-19.

[2] なかでもグブラ(ビブロス)侯リブ･アディは 65 通の書簡を送っている。参照　森際 1981，57-59 頁。

[3] 次王トゥトアンクアメンの「信仰復興碑」に伝統宗教に復帰した理由として説明されている。参照　森際　近刊 c.

[4] Cf. Kemp 1989, pp.262-266., Reeves 2001, pp.103-106., Aldred 1988, pp. 303-306.

として、帝王親政システムを創造する機能を持ちえた、と主張するのである。

このような見方の積極的論拠については次章以降で提示することとし、本節では対抗学説である異端王説の批判的検討を行う。

第2項　異端王説の矛盾

まず、異端王説の矛盾のいくつかを指摘しておきたい。この学説を要約すれば、王アクエンアテンはこれまでの国教であったアメン・ラー信仰を捨て、独自のアテン信仰を行うために、首都を捨て、もっぱらアテン神を祭るために新都を作り遷都し、そこに籠もって日々の礼拝を中心とする信仰生活に家族ぐるみで入り、他を顧みなくなった。[5]百歩譲り、これが真実だとすれば、それはすでに極めて奇妙な異端生活であることを指摘したい。

第1に、異端者が自ら、あるいは、家族だけを連れて隠遁するのならば理解できる。が、首都を移すというのは隠遁者にふさわしい態度であろうか。それはもはや異端を自認する者の態度ではなく、正統派になろうとする者の行動であろう。アクエンアテンはまさにそのような行動をとった。宗教改革を行ったのである。これは彼を「異端王」と呼ぶ論者自らが認めるところである。[6]であるとすれば、すでに、「異端」という表現が適切でないことは明かであろう。

第2に、確かに、「異端」という表現自体は直接「隠遁」という言葉とは結びつかないだろう。たとえば、アリウス派キリスト教の信者などは、異端とされつつも活動的で、自分たちが主流派となる共同体を作り維持していた。では、アクエンアテンはこのような意味で、すなわち、部分社会で優勢な勢力の一員としての異端であったろうか。それですらない、というのが史実である。アクエンアテンはエジプト全土の改宗を試みたのである。

第3に、「異端」という言葉は＜政治的無関心＞や＜政治的センスの欠如＞とも結びつけられることがあり、異端王説の論者は、一代で終末を迎えたことをもって、アクエンアテンについてもこれが当てはまるとしているようである。が、はたしてそうであろうか。アクエンアテンの場合にはこの想定は妥当しない、というのが本稿の主張である。

異端王説の論者自身が述べるように、[7]アクエンアテンはエジプト全土に及ぶ宗教改革を断行し、遷都まで行っているのである。政治的実力を欠く者に多くの有力者の利害にとって多大の影響を与える遷都といった事業が実現可能であろうか。それは有力で有能であったことを誰も争わないトトメス4世やアメンヘテプ3世など、第18王朝歴代の帝王もできなかったことである。そのような大事業が政治的関心や能力に問題がある王にできることなのであろうか。遷都という事実が異端王説の破綻を何よりも雄弁に物語ると考える。

第4に、この観点から改めて異端王説を検討してみると、すでに「異端王」という表現自体が矛盾に満ちた表現であることに気づかざるを得ない。「異端」という表現の簡単な考察が既に明らかにしたように、王の権威を持つ者が異端となることは極めて困難である。王が異端であると認められるような状態では、その王はすでに王としての権威を失っているはずである。逆に、王がその権威を保っている限り、王権を用いて異端と呼びきることができない状態を作り出しているはずである。

たとえば、異端王説の代表格であるレッドフォードは、アクエンアテンの独裁者ぶりを非難してその著を結んでいる[8]が、もしそこまでの威令を発揮できるのであれば、王の信仰は異端であると多くの人に信じられていたとしても、王の権力は面従腹背を強いて、その信仰は表面的には正統信仰、国家宗教として妥当していたと言わざるを得ないであろう。そこまで認めるのであれば、つまり、王が政治的手段を用いて布教しその信仰を強制した、というのであれば、王が政治には無関心であるとの主張は取り下げるべきであろう。

第5に、この明らかな矛盾を避けることは可能であろうか。レッドフォード自身は次のように言う。[9]アクエンアテンは、宗教政策だけは熱心に行ったが、その他の内政や外交には無関心であった、と。これも一見問題のない説明のように見えるが、はたしてそうか。まず、この点を認めるならば、彼が政治的に無関心であった、という断言は撤回し、「但書」を添えねばならない。添えた途端に、なぜ但書にすぎない部分を以て、彼が万事につき独裁者であったと言えるようになるのか、を説明しなければならない。ここまで来たならば、そもそも独裁ができるほどに実力がある者が、どうして宗教事項を除く内政外交に無頓着であり得たか、という問題が出てくるはずである。

以上から、無理をすることなく、矛盾を犯すことなく、アクエンアテンを異端王とすることはでき

[5] Redford 1988, pp. 142-153, Hari 1985, pp.7-9.
[6] Redford 1988, pp.157-181.
[7] ibid.
[8] Redford 1988, p.235.
[9] Redford 1988, p.233.

ない、と主張する。このことが示されれば、この章の目的は果たした。

なお、これは異端王という想定がまったく無理である、との主張を意味するものではない。異端王が言えるとすれば、それはアクエンアテンのように宗教改革と遷都を断行し得た者についてではない。それはむしろ最初から、王の権威が頼りなく、その信仰が異端として葬り去られるのが時間の問題であるトゥトアンクアテン、のちのトゥトアンクアメンのような王のことをいうのであろう。[10]

第2節　代替説の提示

異端王でなければ、アクエンアテンはいかなる王であったのか。それに代替する学説はどのようなものであれ、当時の社会と人間について信頼ができる想定の下で史実を説明できるものでなくてはならない。説明すべき史実として、第1に彼の宗教改革、第2に遷都という事実がある。第3に、その治世における内政と外交がある。そして、その説明の信頼性を確保するためには、彼が狂信的とも思える宗教改革を断行したにもかかわらず、また内政外交をないがしろにしたと非難されるような治世であったにもかかわらず、なぜ人々は新たに都市を建立してまで彼に従っていったのか、これを納得できる形で説明できなければならない。言い換えれば、彼の支配の正統性構造が了解可能な形で説得力をもって提示されなければならない。

筆者のこれまでの第 18 王朝の正統性戦略を巡る論考を用いてこの課題にあたりたい。

第1項　短い答え

以下で述べることがらについて、全体の見取り図を与えるべく、ここで議論のあらましを述べておきたい。

第 18 王朝の歴代帝王はその権威を王の神格性と軍人・政治家としての力量に裏打ちされたカリスマ性に負っていた。王位自体がもつ権威は、王朝支配が制度化されればされるほど、向上した。それは、制度化が、王家の繁栄が自己の利害に一致する有力者の数が増え、構造化していくこと、また、第 18 王朝による支配の正統性イデオロギーの社会的浸透の成功を意味したからである。しかし、近代官僚制と立憲制を柱とする近代国家における法治主義的支配に比べると、その制度化は不徹底なものであり、その分、王位の権威も崩壊しやすいものであった。したがって、第 18 王朝の正統性戦略は、王家の権威を積み上げつつも、各王個人の神格性および人格的魅力によって常に補わねばならないものであった。[11]

この戦略にとって、必須の存在でありながら、最大の障碍ともなったのが、アメン神官団である。この団体は、王の祭礼活動を輔弼し代替することによって王の神格性の確保と強化にとって必須の存在であると同時に、古代的なものであれ、官僚として、少なくとも王家の神事に関する事務万端を所掌し、日々の宗教活動の円滑な運営を保障していた。

第 18 王朝の正統性戦略は、アメン神官団を手足として使いこなすことによって王による親政体制を完成させることであった。ところが、歴代帝王による戦略推進が成功すればするほど、手足として働くはずの機関がときには事実上の選帝権限をもつに至るなど、頭脳の役割を果たそうとするにいたる。王の支配の正統性の重要な部分が、アメンの息子としての神格性に存し、アメン神官がアメンを祭る権能を持つ限り、それは不可避であった。アクエンアテンの父アメンヘテプ 3 世の治世に至り、この正統性戦略にとって神官団の有効な制御と利用は最大の課題となった。この王は自らの政治的才覚を用いて現体制で最大限可能な神官団制御を行ったと評しうるであろう。[12]

アクエンアテンの治世においては、父の路線をどのように受け継ぐかがあれかこれかの極限的な形で問われた。一つは、父と同様のカリスマ的支配を神官団に対して行い、基本的に父と同様の支配を行うことである。今ひとつは、アメン神官団に依存しない、より純粋な親政を行うことである。それは、第 18 王朝の正統性戦略の完成状態と思われたアメンヘテプ 3 世の支配をさらに一歩進める、想像を超えた親政支配の純化であった。[13]

それは、第1に、アメン神官団から神を祭る権限を奪うことから始まる。祭祀権を王専属、王固有の権限とするのである。そのために、アメン神からアテン神へと国教の対象を変更し、さらにアテン信仰の教義を王にのみ祭祀権を認めることを中心とするものへと仕上げることが必要であった。アテンを冥界をも含め唯一の神とし、その祭祀権能をエジプト内外において王のみに認めることを主軸とするアテン神学は、まさにその注文に応えるものであった。

---

[10] 王の名称自体の変遷がその事情を物語る。すなわち、トゥトアンクアテン（＝アテンのいきた似姿）からトゥトアンクアメン（＝アメンの生きた似姿）に王名を変更することは王がアテン信仰を捨てアメン信仰に戻ったこと、即ち国家神をアテンからアメンに変えたことを意味する。

[11] 参照 森際 1996，3-10 頁。

[12] 参照 森際 2003a 16-21 頁。

[13] 参照 森際 2003b 231-237 頁。

アクエンアテンは、自らの名前をアメンヘテプ4世からアクエンアテンに変え、[14]このような教義をもつアテン神学の実践を内容とする宗教改革を断行した。

さらに、通信交通手段の限られた古代社会にあって、遷都を断行することにで、アメン神官団を物理的に隔離することにも成功した。

こうしてアクエンアテンは、第18王朝の正統性戦略をその極限まで進めることに成功した。しかし、それはこの戦略遂行の成功をも意味するものではない。というのは、戦略自体の成功を語るためには、その完成形態の持続性、システム的安定性が不可欠であるからである。

史実が示すように、アクエンアテンの築いた支配システムは短命であった。「異端王」という矛盾に満ちた汚名に甘んじなければならぬほど、短命であった。システム的安定を確保できなかったことには多くの理由を挙げることができよう。本稿では、そのうちアメン神官団に代替する神官組織、行政事務を司る官僚組織、常備軍の機能と位置づけ、といった国家組織の主要問題について後に言及することができるにすぎない。本稿の主たる努力は、新首都アケトアテンの都市構造とその建築、およびそこで発生した様式の政治学的考察に注がれる。そこでこれらの問題に対してどのような対応が行われたかを検証し、宗教改革下の王朝支配システムの安定についてどのような施策が行われたかを検討することになる。

本項を結ぶにあたって強調しておきたい。ここで問題にしているのは、決して道を外れた異端王による惑いの軌跡などではなく、古代社会における宗教のもつ政治的意義を最大限発揮させ、第18王朝による支配の正統性戦略をその極限状態にまでもたらした政治的天才の業績であり、新王国時代における文字通り王道を歩んだ者の足跡である。

第2項　第18王朝の正統性戦略

本項では、先項で述べた第18王朝の正統性戦略について、筆者のこれまでの論考を用いてより詳細に述べ、アクエンアテンの戦略的課題を鮮明にする。まず、「第18王朝の正統性戦略」の定義である。

それは、１８王朝に関する一連の論考でその内実を明らかにしつつある、１８王朝の王が神意の解釈権を独占する、実質的親政を手中にするための政策枠組みである。すなわち、アメン神官団を中心とする国内政治勢力との妥協からそれへの対抗、そしてその排除にいたる過程、戦争から外交へといたる国際関係構築を通して、一貫して目指されていたものとして実質的親政を捉え、折々の統治政策をこの戦略実現の方策と見ていく枠組みである。[15]

この戦略の展開において取りわけて重要な役割を担ったのが、アクエンアテンの父アメンヘテプ 3世である。

アメンヘテプ３世の宗教政策をみるためには、自己の王としての正統性を確保するために、いかなる手段を用いたのかということを検証する必要がある。その治世は、まれにみる政治的・経済的な繁栄を特徴とした統治であったから、これまでの１８王朝の正統性戦略で動員された正統性根拠のうちの有力なものはすべてフルに使われていたということが予想される。本稿の仮説が正しければ、その中でも、彼は、個人のカリスマ性に比重を置く立場から宗教を重視する立場へ移っていったはずである。すると、宗教的な要素が自己の正統性のベースになっていくのであるから、自らの宗教的地位の向上とその広範な承認、これらが重要な政策目標となるはずである。[16]

その宗教政策の内実であるが、

そのような傾向はすでに先王トトメス4世、アメンヘテプ2世においても見られるであろうが、アメンヘテプ３世における特徴は、単にそういった人事権といった舞台裏、事務局レベルでの宗教政策だけではなく、具体的な教義内容に関しても王権に有利なものを紹介し、実施し始めているということである。具体的にはラー神に対する信仰のウェイトを上げていき、かつラー神との関係における王の特別な存在性格、アクエンアテンにおける「公共的」かつ専権的に神の声を聞く神格へと至る様々な試みがなされているということである。この点は、資料的には次のように跡付けることができるだろう。アメンヘテプ３世治世代に見られるラー神とアメンヘテプ３世の関係を強調した図像・碑文、アメン以外の伝統的なエジプトの神々とラー神との関係を強調した図像・碑文、などである。こうして、１８王朝の正統性戦略において宗教政策というものを前面に出すべき時代になっていたこと、そのさらなる展開を、アクエンアテンが現にしたような形で進めることも可能な状態にまでアメンヘテプ３世の治世は到達していたことを看て

[14] テーベで即位したアメンヘテプ(アメン神は満足したもう)4世はアクエンアテン(アテン神にとって有用なもの)に王名を変更することでアメン信仰との決別とアテン神を国家神にすることを明示した。

[15] 森際 2003b, 13 頁.

[16] 森際 2003b, 19-20 頁.

取ることができる。[17]

第3項　アクエンアテンの宗教改革の意義

では、このような動きを受け、アクエンアテンの宗教改革は、これに比べてどのような特質をもつことになるのであろうか。

アクエンアテンの宗教改革は、アメンヘテプ３世の一見完成したかに見えた集権作業をさらに進め、権力を王権の下に集中する方策があることを明らかにした。神意の解釈権を独占するためには、すなわち神官団の最も重要な機能を奪取し、それを本来あるべきところに戻すためには、自身が神になるか神に最も近い存在になることが重要なのである。それにはアメン神に対抗できる神が必要であり、それがアテン神であった。[18]

したがって、その宗教改革の意義は次のようにまとめうる。

アクエンアテンは、父王アメンヘテプ３世にいたる歴代の王の宗教政策が路線を引いた、太陽神を中心とした宗教を、その路線に忠実に引き継いだ。その点では、彼は、王朝正統性戦略の愚直なほど忠実な継承者であった。彼をして今ひとつの経過点たることに甘んじさせず、頂点を極めさせたのは、この路線上に存在しつつもそれが実践されるまでは構想することすらできなかった根底的な改革を彼が実践したからである。これは予想を超えたことではあったが、この路線上、ありえないことであるどころか、一端現実化してみれば、常に既にそこにあった、当然に展開しうる一つの選択肢であった。この意味で、アクエンアテンの改革には恣意性は存在しない。[19]

さらに、この改革の政治的意義に目を向けると、

宗教を中心とする国政を敷くと、アメン神官団その他の宗教勢力が絶大な権力を持ってしまうかのように思われるが、アテン信仰の教理はそれを不可能にした。彼、アクエンアテンのみが神の意志を理解でき、伝えることができるという宗教上の大変革を行うことによって、宗教の比重が強まれば強まるほど、唯一の神意解釈者としての自己の権力が強まり、逆に神意を解釈できないアメン神官団等、それができなければほぼ存在意義がない神官団の権力はどんどん弱体化する、このような性格を持つ政策を彼はとることができたのだ。この発想の持つ究極的性格は、神々の多様化と共存を基本としたアメンヘテプ３世の宗教政策と対比すれば一際明確であろう。相対化ではなく、絶対化による他者の影響力排除という究極性である。[20]

第4項　遷都後の政治と行政

成功した宗教改革と遷都に伴い、アクエンアテンはかつてない親政の体制を組み上げることができたはずである。しかし、その制度については、王朝の歴史から彼を抹殺する動きがあったため、[21]詳細はほとんどわからない。にもかかわらず、「信仰復興碑」[22]に引き摺られ、そのシステムは否定的に評価されがちである。その間の事情について、筆者はかつて次のように述べた。[23]

アクエンアテンの治世代は、内政・外交ともに破綻した、と「信仰復興碑」には記されている。確かに、アクエンアテンの統治に不満があった勢力、とくにアメンの神官たちはそのように受け取ったであろう。また、アクエンアテンに代わって統治する勢力は、そう言わねばならなかったであろう。しかし、これは文字通りに受け取ってはなるまい。というのは、アクエンアテンは、とにもかくにもこれだけの怨嗟を生む宗教改革と遷都とを実現したからである。この点を忘れてはなるまい。このような観点から改めてその「失政」に目を向けると、彼は内政に情熱がなかったわけではなく、むしろ関心が強かったために混乱した、と言うべきであろう。すなわち、宗教的な事業が内政において他を圧倒する優先順位に置かれたため、経済をないがしろにする方向に社会変動が生じ、それを自己利害に反すると判断したものが多数発生したと考えられる。

しかし、このようなスクリーニングがあったにもかかわらず、アマルナ時代の反乱その他についての記録の欠如を見れば、全土で実効的な支配が行われていたと考えるのが自然ではないか。ここに、その祭政一致の政治、およびより日常的な行政について、知られている僅かな断片を集めておこう。

ヴァン・ディークは次のように述べる。[24]

アマルナ時代[25]の殆どの情報は王が遷都する以前のテーベとアケトアテンから得られた情報である。それ以外の国内の情勢は殆ど分からない。ただアクエンアテンはアケトアテン以外の地域にも赴いたはずだ。境界碑には、たとえ他のどの地で亡くなっても彼の遺体はアケトアテンに埋葬されねばならない、とある。／アテン神殿はヌビアやメンフィス・ヘリオポリス以外の他の土地でも建設されていたに違いない。遷都以降もアマルナ外での建設は行われていたはずだ。

[17] 森際 2003b，17 頁.
[18] 森際 2003b，17 頁.
[19] 森際 2003b，18-19 頁.
[20] 森際 2003b，19 頁.
[21] 第 19 王朝セティ 1 世，アビュドス王名碑には彼をはじめアマルナ時代の王 4 名の名はない。
[22] 注 3 参照。
[23] 森際　2003a ，236 頁。
[24] Van Dijk 2000, p.291.
[25] アケトアテンに首都があった時代。遺跡の現代名にちなんでアマルナ時代と呼ぶ。

ここで注意しておきたいのは、アクエンアテンがその王都に籠もりきりだったのではなく、その用務は明かではないが、少なくともアテン神殿建設とそれに伴う祭祀のため、すなわち広義の布教活動のためにその領土を巡っていた、と推察されることである。

このような巡幸が行われないときにあっても、秩序維持が行われていたとすると、当然に問題になるのは、いかにして支配が可能であったか、ということである。すなわち、アメン神官団を排除した後、アメン神官団が担っていたであろう種々の宗教行政事務をアクエンアテンのどのようなスタッフが担ったのか、という問題である。屋形によれば、[26]人材の職務内容は宗教改革に応じて変わったが、人材自体は変わらなかった。アテン大司祭は、アメン神を捨て王のアテン信仰に従いアケトアテンに移住し、王の日常を支えたと考えられる。その墓には王のアテン神への礼拝儀式を描いている。[27]

では、宗教行政とは異なった、古代エジプトのノモス単位の行政を束ねて、日常の徴税から配給までを行う機関についてはどうか。これについては、宗教改革による影響はなかったであろう、というのが識者の推測である。たとえば、「新王国時代の殆どの時代を通じて行政の中心地は北のメンフィスであった」。[28]「アクエンアテンは宗教・国家信仰上の首都テーベをアケトアテンに換えたが、行政の中心地メンフィスは」機能し続けたようである。「二人の宰相のうち一人はアケトアテンに居住したが、彼の北の同僚はそのままメンフィスに駐在した。この都市はアマルナ時代を通じて国家行政の中心地であり続けたようだ。」[29]

また、その宮廷における宰相クラスの人事については、[30]

> アクエンアテンは、自分の手足となる官僚たちの選抜についても、人を見る目がなかった、という批判もある。しかし、事実が示しているように、遷都を行うだけの行政手腕をもつ者を現に彼は選んでいるのである。政治に無能・無関心な者が遷都と宗教改革を行うために必要な人間を動かし、このような大改革を遂行したとは考え難い。

この主張に対し、「アイやホルエムヘブはアクエンアテンを支えていた官僚であった。彼らはアクエンアテンの死後、直ちに彼を裏切り、権力を簒奪し、トゥトアンクアメンを動かして再度の遷都を行ったではないか」との反論が想定される。しかし、既述のように、彼らはアクエンアテンの生前には反旗を翻すことができなかった、彼らをして忍従せしめるだけの力がアクエンアテンにあったことに注目したい。確かに、面従腹背していた者を選んだというのは彼の限界かもしれない。しかし、別の見方をすれば、後に王の地位を襲い、新たな王朝を建てるまでの力量を持つ人間たちを選び、さらに、自らの治世にあってはその実力を自分のために使った訳であるから、それを人事の失敗というのは不適切ではないか、との再反論も可能である。

第3節　新都アケトアテンが示すもの略説

第１項　王都の概要

アクエンアテンはアメンヘテプ４世としてテーベで即位した後、テーベにアテン神殿を建設した。さらに遷都の決定、王名変更、アメン神からアテン神への国家神の変更と、彼の宗教政策を着々と現実のものとする。この王の宗教政策の具体的実現、アテン神のために建設された新都はアケトアテン（アテンの地平線）と名付けられた。[31]アケトアテンはどのような首都であったのか、トロイ[32]の記述に準拠しつつ、境界碑[33]・貴族の墓に残された碑文・壁画等の史料と発掘報告書に見られる都市プラン、当時の生活を物語る出土遺物に基づきアケトアテンの様子を素描し、その上で、政治学的観点からその意義を検証する。

アケトアテンはおよそ 16 x 13 ㎞で、主たる建築物はナイル川東岸にあり、西岸はこの都市の食料を供給したであろう耕地である。その 162 ㎞²と見積もられる耕地面積から、人口は２万から５万人出会ったと推定される。[34]

王都は新王国時代の都市がそうであるように、周壁がなく、東岸は川に沿って南北約 5 キロメートル、幅約 1 キロメートルにわたって拡がっていた。都市の中央には広大な屋根のないアテン信仰の神殿複合体が集中している（図１参照）。[35]儀式上重要なので、しば

---

[26] 屋形　1989, 72-73 頁。

[27] 例えば、北の墓地に墓があるアテン大司祭、メリラー1世。図２　参照。

[28] Van Dijk 2000, p. 291

[29] Van Dijk 2000, pp. 286-7.

[30] 森際 2003a, 236-237 頁。

[31] 治世４年の日付のある境界碑 X,K,M に、遷都決定と新都の命名，新都の境界を決める儀式、アテン神への大量の供物、建設予定主要建築物が記されている。
参照　Davies, 2004(1908), *Rock Tombs* El Amarna V.

[32] Troy 2003, pp. 33-36.

[33] 砂漠断崖崖面を彫り込んで作られた。首都に属す土地の境界を示す。西岸３基、東岸 11 基が確認。

[34] Kemp 1989b, p.269.

[35] Pendlebury 1951, pl. I; Kemp & Garfi 1993, pp. 28ff., sheets 4-5; cf. Mallinson in Kemp 1995a, pp. 169ff.

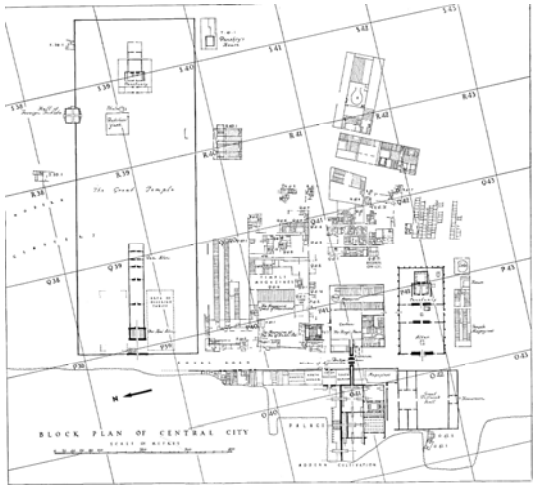


図1　アケトアテン中心部

しば墓壁浮き彫りに描かれている「王の道」は南北に走っている。神殿複合体が道の東側にあるのに対し、大王宮と北の王宮はこの道の西側に位置しナイル川に面している。この道には橋が架かっており、王はそれをバルコニーとして利用し、そこで人々に姿を見せたと考えられる。大王宮では行政と儀式がともに行われたと考えられ、[36]それはこの橋によって、アテン小神殿や私的な「王の邸宅」[37]と連結していた。

何千もの供物用パンを生産するパン焼き釜など、神殿の活動に必要な生産施設[38]や、王の外交書簡が収納されていた公文書保管所[39]も、この中央区[40]にあった。

中央区の南北には、大邸宅や小住宅からなる賑やかな居住地域が隣接していた[41]。有名なアクエンアテンの王妃ネフェルティティの頭像が発見された彫刻師トトメスの家が発見されたのもここである。さらに南に行くと宰相ナクトの大邸宅もあり、中央政府の宰相クラスが市内に住んでいたことがわかる。

第２項　王都の分析

では、ここからアクエンアテンの支配の特質とその安定性についてどのようなことが分析できるであろうか。

第１に、アケトアテンは計画的に造られた人工都市である。わずか２年の短期間にピラミッドを作る技術を持つ文明にあって速やかにつくられていったものである。その境界碑は正確に都市の規模を規定している。[42]リーブスによれば[43]、東西に延びるアテン大神殿の東端をまっすぐ進めば、アクエンアテンとその家族の墓所に至る。王家の谷がテーベの西側にあるのと比べれば、東の崖の縁にあることは何を意味するのであろうか。

ひとつは、その配置がアテン信仰の３つの特徴に合致していることである。アテン信仰はそれまでのアメン信仰と同様、ヘリオポリスの太陽神（ラー）信仰の影響を強く受けている。ラー神と集合し、太陽神として自らが天地創造神であると主張した。[44]アメン信仰と異なる教義は次の３点である。すなわち、①神託を受けられるのは王のみである、②アテンは冥界をも司る、③王を含め人々は太陽と共に目覚め（復活し）、太陽が沈むと眠りにつく（死ぬ）[45]。この考えによれば、東から昇り西に沈む太陽の道に設けられたアテン大神殿の東、太陽が昇る淵源に唯一の神意解釈者であるアクエンアテン王が死んだ後に眠る墓所があるのは理屈に適っている。王は毎日太陽と共に復活し、沈んだ太陽とともに翌朝に備え、東の崖の麓に戻るのであろう。

第２に、アケトアテンがこのようにアテン神学に適った構造に設計されているとすれば、それは当然に、墓所に眠る前の、生きて王としてアテン神をまつるアクエンアテンにとって合理的にできているはずである。本稿は、アクエンアテンがついにアメン神官団から自由に親政を行いうるに至ったと主張する。であるならば、親政の実を挙げるために、アクエンアテンはどのような統治を行うであろうか。

それは完成した親政統治システムの安定化・システム化である。そのためには、親政を制度として安定させることが必要で、制度が定着するには多くの条件が満たされなければならない。それについて筆者はかつて次のように述べた。[46]

> これは単に、統治を可能とする軍事・政治・祭祀の体制だけではない。それらを安定的に維持する財政システム、また、王の意志を絶対のものとする専制的秩序観とそれを正統のものとしてその維持発展を自己の利害とする官僚たち、そしてそれらのもとでの生活を幸福で名誉あるものとして観

[36] Pendlebury 1951, pp. 33.
[37] Pendlebury 1951, pp. 87ff.
[38] Cf. Kemp 6 Garfi 1993, pp. 52ff., Fig. 11 p. 51.
[39] Pendlebury 1951, pp. 113ff.; Kemp & Garfi 1993, pp. 61ff., fig. 12, p.60.
[40] Cf. Fig. 3. Pendlebury, J. D. S. 1951, pl. I.　参照　図1
[41] Cf. Frankfort & Pendlebuty 1933, pp. 1ff.; Kemp &Garfi 1993, pp. 4a6ff., 73ff., sheets 3.8, pp. 82ff.
[42] 境界碑 S, 治世６年の日付がある。参照　Davies, 2004(1908), *Rock Tombs* El Amarna V.
[43] Reeves 2001, pp. 115-119.
[44] 屋形 1989, 72-74.
[45] アテン讃歌　参照　森際　近刊 b.; Davies, 2004(1908), *Rock Tombs* El Amarna VI.
[46] 森際 2003a,　p. 233.

念させるイデオロギーと象徴体系を含む。これらが全体として一つの生活体系をなし、王権の正統性と相補的な関係にあること。私たちが王の親政の完成した姿を想像すれば、それはこれらの条件が満たされている状態であろう。この秩序の安定の秘密は、それが王権を中心とし、王の専制を支えるという形を取りながらも、それを支える人間たちにとっても、自己利害の維持発展をもたらすシステムとなっている点にある。王のわがままは必ずしも自己の利害に反するわけではなく、むしろ、それを促進することが多いからである。

すなわちアケトアテンの生活においても、アテン信仰の定着発展への協力が、宰相たち自身の生活の安定と繁栄をもたらし、少なくとも都市住民にもより少ない度合いであれ、よい生活をもたらす、ということである。宰相クラスの邸宅や市民の小住宅が確保され、生活を楽しむことができた様子が市中心部とその隣接南北地域の様子から窺えるとすれば、それはそのような条件が整っていたことを推察させる。

アケトアテンに遷都したアクエンアテンは、供物に満ちたアテン大神殿で家族とともに、毎日昇り来るアテン神に礼拝し、人々はそのアクエンアテンを拝んだ。（図２上段１右端を参照。）

それは神学的理解としては、唯一神意を理解できる存在を通して神に礼拝することを意味するであろう。が、それは同時に、豊かな供物が象徴する、物資の豊富な生活をもたらす王に対する感謝の表現とも解釈しうる。それは、アケトアテンの都市生活が、（供物となる）大量のパンの生産がもたらす収入と同時に、（都市住民自身が）地方や対岸に所有する土地からの収入によって、豊かな生活を彼らにもたらしていたことを推察させるのである。[47]

行政官や生産者市民についてはこのような利害の一致があるとして、微妙なのは、王の幼友達であり、忠誠を尽くす職業軍人たちである。彼らの住居は戦略的必要からも都心にあるが、それは明らかに単なる兵舎に過ぎず、豊かな生活の分け前に与っているとは言い難い。しかも、別稿で述べた[48]ように、時代は軍事から平和攻勢を行う外交へと移っていたので、職業軍人の対外的活躍の機会はアクエンアテンのもとでは期待できなかった。首都の防衛と治安という形でしか彼らは存在証明ができなかったのである。

このような矛盾を抱えつつも、王はその治世において兵士の忠誠を勝ち取ることができた。それはいかにして可能であったのか。ひとつは、公文書保管所出土のアマルナ文書にある平和攻勢を基調としつつも、兵士たちを喜ばせることも視野に入れた遠征隊を時折派遣することである。[49]今ひとつは、その身分的利害を忘れさせて兵士を包み込むような壮大な宇宙論・人生論の創造と実践であり、アテン神学はまさにそのようなナラティブ、イデオロギーの提供である。当時の宗教は、今日のような私的な問題ではなく、政治神学であったことを忘れてはならない。

親政システムの制度化へ向けて、このように着々と手が打たれていた。アクエンアテンは政治に疎いのではなく、政治神学の天才的才能の持ち主であった、との本稿の主張はここにも現れている。しかし、アマルナ発掘の成功にもかかわらず、アケトアテンの都市生活についてはあまりにもわかっていないことが多い。それは、ゴミや汚物処理をどうしていたか、衛生・医療はどうなっていたのか、都市行政に必要な費用はどのように賄われていたのか、など、いわゆる都市問題に関わることがらだけではない。

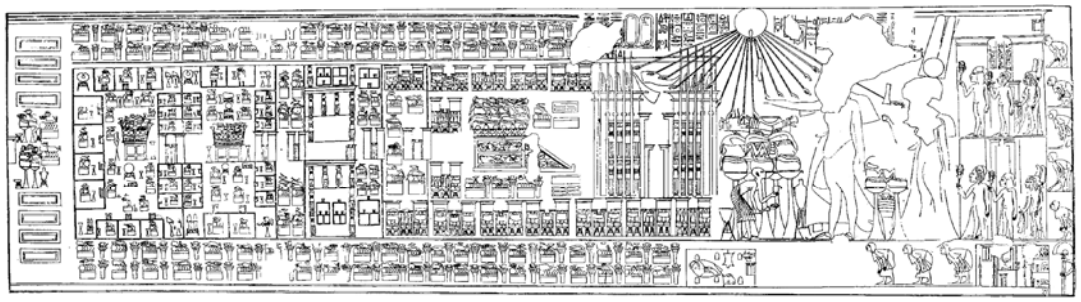
より重要なのは、都市財政も含めた国家財政、そしてこの都市を根拠地に国家の政治・行政・教育がどのように行われていたか、という観点からの発掘調査データの分析である。恐らく、都市行政も「国家公務員」が兼ねていたと思われるが、その場合、神官団の書記たちがこの公務員に相当するのか。彼らとメンフィスの行政担当者との職掌の分担、相互関係はどうであったのか。

第３に、アテンの神官団がその内部でアテン神学の教育研究を行っていたと考えられるが、彼らは王に危険視されると同時に信頼されていたはずである。というのは、親政の制度化に不可欠なのは、親政を実際に行う後継者を養成するシステムであり、系統的発展的神学教育はその中心をなすはずであるから。アクエンアテンはついに適切な後継者を育てられず、この親政システムは一代で瓦解した。しかし、仮に後継者を得たとしても、その教育訓練が制度化されていなければ、このシステムの安定は得られなかったはずである。このとき必要なのは、一人のプリンスとその帝王学だけではない。そこにそのプリンスを支えることが自らの利害に一致し、かつそこに生きがいを見出す多くの支配層エリートを

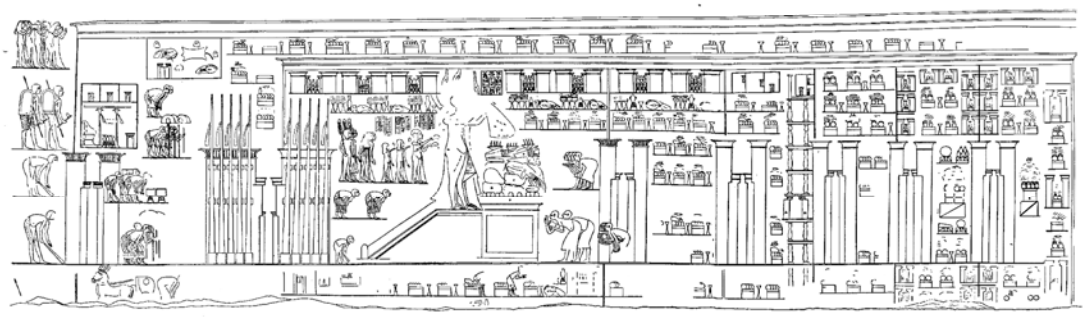
[47] Troy 2003, p. 28. 「推測によれば、これらの家々にすむ官僚の俸給は、その富の一部に過ぎない。借り入れか相続で得た土地保有の形をとった私有財産がその収入を補ったと考えられる。これらの保有は、都市の西岸に新規に設けられた、アテン教団の領地と先祖代々の地方の土地とからなる。…このような財産関係が地方と都市に密接な関係をもたらした。」

[48] 森際 2003a，p. 236.

[49] 森際 1981，p. 57–59.

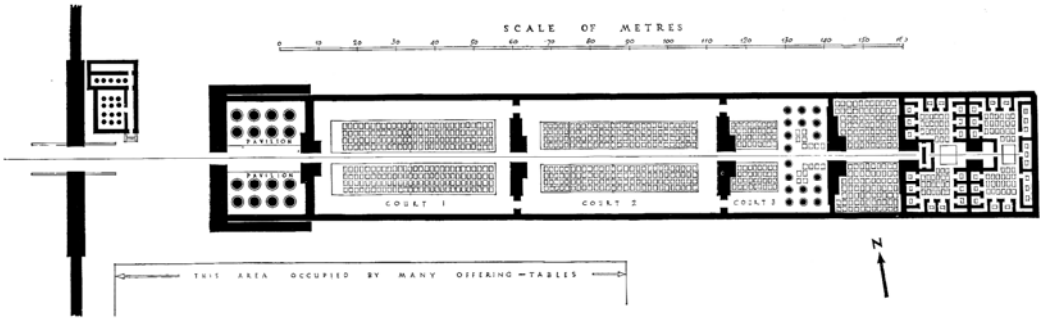


1. Tomb of Meryrē' I (Davies, *Amarna* I, Pl. XXV)



2. Tomb of Panehsy (Davies, *Amarna* II, Pls. XVIII, XIX)

REPRESENTATIONS OF PER-ḤAI AND GEM-ATEN



GREAT TEMPLE: RESTORED PLAN OF PER-ḤAI AND GEM-ATEN

図２ 上段１・２　アテン大神殿での祭儀の様子[50]
図３ 下段　　アテン大神殿の復元平面図[51]

創出するエリート養成機関なのである。この親政システムの短命の原因はこの意味での教育問題の軽視にあるのではないだろうか。教育施設の欠如が象徴する教育制度の軽視。それが、豊かな計画都市アケトアテンのもっとも貧しい点ではなかったか。

第4節　むすびと残された課題

20 年に満たずして棄てられたアケトアテンはどういう首都だったのか。それは支配に必要な組織と思想を欠く都市だったのだろうか。本稿のさしあたりの結論は、それは第 18 王朝の親政システムの制度化に必要な多くの要素を備えていた可能性がある、ということである。その要素がどのようなものであったのか、以下に確認する。

18 王朝の王権の権威は、王の親政を実質化する秩序の中心的要素である。この権威は神学的世界観と世俗的正統性の両要素を含む。親政体系は、これを中心としつつ、自らの祭政にわたる活動によってこれらのイデオロギーを再生産しつつ、それがもたらす有形無形の利益を享受する王のカリスマ性によって、また王と利害を共有する神官・軍人および役人たちの実務遂行によって支

[50] Pendlebury, 1951, pl. V.
[51] Pendlebury 1951, pl. IV.

えられていた。[52]

それはここでは、王や臣下の活動と生活を支える都市システムの諸要素を意味する。では、ここには何が欠けていたのか。それは、このような王や臣下を（支えるのではなく）生み出すシステム、すなわち後継候補とそれを支援するエリートを養成するための制度、である。が、その答えを詳細に検討するためには、アマルナ期の王室経営を支える国家経営の実態のさらなる探究が必要である。とくに、その財政に関わる資料発見がまたれる。

【参考文献】

Aldred, Cyril.1988, *Akhenaten, King of Egypt*, London & New York.

Baines, J. 1998, “The Dawn of the Amarna Age”, in D. O’Conner and E. Cline (eds.) *Amenhotep III. Perspectives on his Reign*, Ann Arbor.

Campbell, E. F. Jr. 1964, *The Chronology of the Amarna Letters*, Baltimore.

Cumming, B. & B. G. Davies.1982-1995, *Egyptian Historical Records of the Later Eighteenth Dynasty*, I-VI, Warminster.

Davies, N. de G. 1903-08, *The Rock Tombs of El-Amarna*, I-VI, London.

Frankfort, H. & J. D. S. Pendlebury, 1933, *The City of Akhenaten*, I, London.

Hari, R. 1985, *New Kingdom Amarna Period: Iconography of Religions* XVI, 6. Leiden.

Helck, W., 1984 (1955,1956, 1957), *Urkunden der 18. Dynastie* (Urk., IV), Berlin.

Hornung, Erik.1999, *Akhenaten and the Religion of Light*, Ithaca.

Kemp, B. J. 1989, *Ancient Egypt. Anatomy of a Civilization*, London & New York.

Kemp, B. J. & S. Garfi. 1993, *A Survey of the Ancient City of El-‘Amarna*, London.

Knudtzon, J. A. 1964 (1915), *Die El-Amarna Tafeln*, I, II, Aalen.

Lichtheim, M.1976, *Ancient Egyptian Literature II. The New Kingdom*, Berkeley.

Martin, Geoffrey T. 1974-89, *The Royal Tomb at El-‘Amarna*, I-II, London.

Martin, G. T. 1991, *A Bibliography of Amarna Period and its Aftermath*, London & New York,.

Moran, W. L. 1992, *The Amarna Letters*, Baltimore.

Murnane, W. J. & C. C. van Siclen III. 1993, *The Boundary Stelae of Akhenaten*, London & New York.

Murnane, W. J. 2000, “Imperial Egypt and the Limits of Power” in R. Cohen and R. Westbook (eds.), *Amarna Diplomacy*, Baltimore & London.

Peet, T. E. & C. L. Wooley. 1923, *The City of Akhenaten*, I, London.

Pendlebury, J. D. S. 1935, *Tell el-Amarna*, London.

Pendlebury, J. D. S. 1951, *The City of Akhenaten*, III, London.

Petrie, W. M. F. 1894, *Tell el-Amarna*, London.

Redford, D. B. 1984, *Akhenaten, the Heretic King*, Princeton

Redford, D.B. 1995, “The Concept of Kingship during the Eighteenth Dynasty” in: D. O’Conner and D. P. Silverman (eds.), *Ancient Egyptian Kingship*. Leiden & New York.

Reeves, N. 2001, *Egypt’s False Prophet Akhenaten*, London.

Smith, R.W. & D. B. Redford.1976, *The Akhenaten Temple Project*, I, Warminster.

Troy, L. 2003, *Resource Management and Ideological Manifestation. The Towns and Cities of Ancient Egypt*, Uppsala Univ., http://www.arkeologi.uu.se/afr/projects/BOOK/Troy/Troyframe.htm, last update: 2004-04-13.

Van Dijk, J. 2000, “The Amarna Period and the Later New Kingdom (c.1352-1069 BC),” in I. Shaw (ed.) *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford.

森際眞知子 1981「アマルナ時代末期におけるエジプトのシリア領土喪失の原因」『史観』第１０５冊、 49-61.

森際眞知子 1996「第十八王朝の正統性とトトメス三世のアジア遠征」『西洋史論叢』第十八号、6-7.

森際眞知子 2003a「アクエンアテン統治論再考」『古代エジプトの歴史と社会』同成社。

森際眞知子 2003b「アメンヘテプ３世の統治における宗教の意義」『西洋史論叢』第２５号。

森際眞知子近刊 a「第十八王朝の西アジア軍事遠征と対外政策　トトメス三世年代記」『世界史史料』第一巻、岩波書店。

森際眞知子近刊ｂ「アクエンアテン王のアテン信仰　アテン讃歌」『世界史史料』第一巻、岩波書店。

森際眞知子近刊ｃ「トゥトアンクアメンのアメン信仰への復帰　信仰復興碑」『世界史史料』第一巻、岩波書店。

屋形禎亮 1969,　「イク＝エン＝アテンとその時代」『岩波講座世界歴史』第１巻、岩波書店、197-226 頁。

屋形禎亮 1978,　「アメン・ラー讃歌(一)・(二)」『古代オリエント集』、筑摩書房、595-609 頁。

屋形禎亮 1978,　「アテン讃歌」『古代オリエント集』、筑摩書房、612-615 頁。

屋形禎亮 1989,「ファラオと国家神」『古代オリエント史ナイルからインダスへ』上巻、日本放送協会学園、44-84 頁。

屋形禎亮 1994,「ファラオの王権」屋形禎亮編『古代オリエント』有斐閣、111-45 頁。

[52] 森際 2003a, p. 235.